「心清事達」

マイプライベートタイム

気仙沼市長（宮城県）　菅原（すがわら）　茂（しげる）

東日本大震災からの復旧・復興、全国からのご支援に感謝

２０１１年３月11日14時46分、市民誰もが経験したことのない強い揺れに遭遇、その後、本市沿岸部を一瞬のうちに壊滅させる巨大な津波に見舞われました。１２４６名の市民の命が奪われ、内２１２名は今も行方不明、この他に関連死１１１名、東日本大震災は本市に未曽有の被害をもたらし、市民を絶望の淵に追いやりました。

あれから12年８カ月、これまで、政府の手厚い復興政策、全国の団体、個人、企業からの支援、何より全国市長会、全国町村会の各自治体による物・心・人の強力かつ継続的な支援をいただいてきました。ここに改めて心から感謝を申し上げます。

津波で打ち上げられた漁船「第十八共徳丸」　出典:一般社団法人協働プラットフォーム

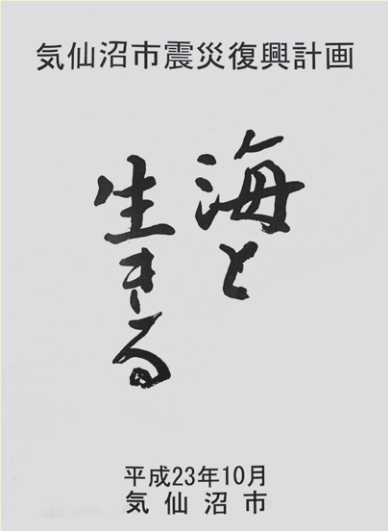
私は大震災前年の４月末に初当選、行政経験も議員経験もなく市長に就任し、10カ月余りで災害対応・復旧・復興に立ち向かうこととなりました。これまで政治・行政の先輩方からはご指導を、市民の皆さんからは叱咤激励をいただいてきました。そして職員には限界まで市民のために働いていただきました。全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。現在、市長生活も14年目、そのほとんどを復旧・復興、そして密接に関連する地方創生に費やし、極めて濃密な時間を過ごしてきました。

大震災発生後は大小さまざまな余震が頻繁に起こりましたが、とりわけ４月７日の余震は最大級で、再び全市一斉停電。津波のあと各避難所一つ一つに明かりがつく度に避難者から歓声が上がり、ようやくほとんどの地域で電力が使えるようになった矢先のこと、非情にも市民はまたも絶望に直面することになりました。幸い、同日の内に停電は解消しましたが、その時、私が覚悟したのは「市民の誰もが復興を諦めても、自分だけは諦めるわけにはいかない」ということでした。支援に来た方からいただいた「百折不撓」と書かれた短冊を今も毎日見ています。

震災復興の支援者が書いた言葉は市長としての覚悟そのもの

海と生きる

大震災から７カ月後、本市の復興計画が完成、副題を公募し、市民を中心に審査し選ばれたのが「海と生きる」。われわれの先人は何度も津波に遭いながらも海の恵みを信じてこの地で生き抜いてきた、史上最大級の災害ながらわれわれも立ち向かっていく、そんな市民の勇気を表す言葉です。まだ、行方不明者の捜索も続く中で、当時としては思い切った選択でしたが、今は本市のアイデンティティーを示す言葉となりました。英語表記は「Stay with the Ocean」。昨年、大震災後当選した市議会議員さんからstayではなくliveとすべきではないかと



市民と共に選んだ復興計画の副題は気仙沼市の思いを表す

2022年に開催した「気仙沼の高校生 MY PROJECT AWARD」での筆者（前列左から6人目）

質問を受けましたが、liveではなく、大震災直後はstayが大事で最も市民の気持ちを表していたので、しばらくこのままにしたいと答えました。

その大切な海ですが、近ごろ異変が起きています。本市の目の前「三陸沖」は寒流である親潮と暖流である黒潮が交わり、北と南双方からの海の恵みを享受する世界三大漁場の一つとして名をはせてきました。地球規模での温暖化は海況にも大きく影響し、水温の上昇には顕著なものがあります。猛暑続きだった今年の夏は本市海水浴場の水温が平年比5℃近くも高く、ホノルルのワイキキビーチ並みの日が続きました。

サンマ、秋サケ、イカの大不漁、不安定さを増すカツオなど本市の屋台骨が揺らいでいます。代わりに本市魚市場のレギュラー品に定着したのがタチウオ、サヨリなど、かつてはなじみのないものばかり。しかも新顔は大量に漁獲されるタイプの魚ではありません。

震災からの復興さなかに刺激を受けたイベント

地球環境の変化にあらがうのは大変なことですが、陸上も含む魚の養殖なども含め、漁業者、加工業者には懐の深さを発揮いただき一緒に変化への対応力を磨いて水産都市気仙沼を守っていきたいと思っています。併せて、水産と観光の融合を標榜してきた本市ならではの「海業」の推進や産業の多角化にも力を注ぎたいと考えています。

人から始まる地方創生、市民が主役のまちづくり

大震災の翌年、縁あって人材育成・教育啓発・社会変革を目的とする社会起業家の発表会「社会イノベーター公志園」が本市を会場に開かれました。著名な財界人、社会活動家などから成る「300人実行委員会」の方々が訪れ、最大級の刺激を与えてくれました。3年後、次の大会に特別枠で出てみないかと誘いがあり、大震災と同様に運命を受け入れるつもりで、私は「えいや～！」と無謀にも挑戦を決意、半年間300人実行委員会からの伴走者の方々にご指導を受け、2015年11月3日、早稲田大学大隈記念講堂での「結晶大会」に臨みました。テーマは「人材育成を基礎とした地方創生のロールモデルを創ること」。現在、本市では「まち大学構想」の名の下、産業・まちづくりの各種人材育成のプログラムを走らせながらリーダーを養成、官・民、営利・非営利、高校生から80歳代までの各年齢層、これらが相互に混じり合うクロスセクターによるまちづくりを進めており、大震災後の移住者も大活躍しています。

市長として、人として貫くべきと、大切にしているもう一つの言葉

結びに私が大切にしている言葉をもう一つ紹介します。20年以上前、北京の故宮博物院で中国人書家に掛け軸として書いてもらった「心清事達」。出典は定かではありませんが「心が清ければ事が達する」という意味で市長就任後、地元書道家に市長室用を書いてもらいました。残念ながら掛け軸の方は家と共に津波に流されました。大震災に遭い、神も仏もないような現状が広がり、心が清くてもなんともならないと感じた時期もありましたが、次第に平時に戻り、日々、市政に対峙する中で、今はやはり市長として、人として貫くべき真理と確信しているところです。